

“鬼はソト、福はウチ”

教育委員会委員 橋本 和明

先日、節分が終わりました。一昔前まではどこの家でも、節分には豆まきをしたものです。わが家でも私が鬼の面をかぶって登場し、子どもたちが両手に持っている豆を鬼の私に投げつけるという行事?を毎年のようにしていました。妻からは、「家中が豆だらけになる」といつもお叱りを受けるのですが、楽しい家族の一光景でした。子どもたちは鬼が不気味で怖いので、心臓をドキドキさせながら手に豆を握りしめ、鬼が「悪い子はいないか?」と出てくると、大声をあげて逃げ惑います。もはや手には豆が残っていないということもたびたびありました。今から思うと、これは子どもたちを成長に導くための重要な儀式だったのではないのでしょうか。

赤ちゃんから少し大きくなり、一人で食事ができるようになる 3 歳から 6 歳頃までの成長段階をいわゆる幼児期といいます。この時期は親に全面的に依存する段階から少し抜け出し、自分でやりたいという欲求が高まります。もちろん、すべてが自分ではできませんが、その欲求が親からの自立や身の自律に向かわせるエネルギーになることは間違いありません。ただ、この時期の子どもは何でも自分でできるのだといった万能感があると同時に、何も怖いものはないといった無鉄砲さも同時に備えています。親としては、万能感と無鉄砲さだけで突っ走ってしまわれると大変なことになりかねないので、「世の中に一つだけでも怖いものがあることをわからせよう」と考えたりしやすいのです。それがお父さんという存在かもしれませんし、少し厳しい保育園の A 先生であったりするかもしれません。先ほどの鬼もその一つと言えましょう。

子どもは自分よりも怖くて強い存在がいることを知ることで、自分のなかにある不安感を感じ取り、行動にブレーキをかけたたりもできるようになります。そして、その次に向かうのは、自分の理想となってくれる強くてたくましい人物への同一視です。つまり、「お父さんのようになりたい」「〇〇戦隊レンジャーのようになりたい」などと自分を重ね合わせていくのです。男の子の場合、この時期に父親のまねや戦隊ごっこをよくするのはそのためもあるのです。

そう考えると、節分の日の鬼の存在は子どもにとってはとても重要な役割をしてくれています。それと同時に、まだまだ目の前の子どもは一寸法師のように小さいけれど、将来は仲間を連れて鬼退治に出かけてくれることをどの親も願っていることだと思います。